

1 “魅せる”プレゼン力

全肢研会長、田村先生の、魅せる「挨拶」から、伝える力、プレゼンする力の重要性を再認識しました。私が感じたポイントは、①魅せる話し方。聞きとりやすいスピード、活舌、間をとり、わかりやすい言葉で。②魅せるパワーポイント資料。濃い背景に白文字、文字数少なく、文字大きく。一目でわかること。③魅せる語り口。笑顔で、視線は聴き手に。時間をかけて会場を見回しながら。原稿などは見ないで、語り掛けるように。指導でもこうありたいもの。

2 ポスター発表で、自分を鍛える

「学びに来ている教員の足を留められずして、どうして授業で子どもたちを惹きつけられようか？」とは、オープニングでの全肢研会長、田村先生の言葉です。発表はどれも、取り組んできた実践への自信と情熱が伝わってくる、熱い語り口。教育は、日々の研鑽と熱意が大切だ、ということに改めて感じました。全国から肢体不自由教育に真剣に取り組む仲間が集まる全肢研は、実践発表の場であるだけでなく、自分自身の「伝える力」を鍛錬する場としても最高の舞台です。若い先生方も、ぜひ積極的な参加を！と思いました。

3 気づく、比較する、考える

ポスター発表より。自立活動の指導の前後で、自分の体の状態の違いに気づく。それにより、今の状態と、過去とを比較できるようになる。そうすると、良くない状態の原因を自ら考えたり、改善しようとしたりできるようになる。体の学習、自立活動の場面での実践発表でしたが、発表者の熱い語りとともに、児童が自己評価を自ら生かしていく過程について「なるほど！」と気づかされる発表でした。

4 アクティブラーニングの視点

主体的、対話的で深い学びを毎時間どう取り入れる？ 目指すところはそこではなく、大切なのは、これら3つの視点から授業改善を図っていく、という思考。子どもが目をキラキラさせながら、話し合いの中で考えをさらに深めていくような授業。過去の「素晴らしいなあ」と思った授業には、概ねこのような視点が自然と取り入れられていた、と講話をされた菅野先生。主体的、対話的、深い、などの文字を追うのではなく、それによって子どもたちの毎時間の学びをどうしていきたいのか、という具体的な絵を描くことが大切なのかな、と考えています。

「八戸」ということで... 私なりの想いを八つ

OPEN! 8 DOORS



参加させて下さった、そして不在の間、学校を支えて下さった、職員の皆さんに、心から感謝...

令和元年度
全肢研青森大会
還流報告
北海道真駒内
養護学校
文責 齊藤昌宏

〜八戸の小窓〜
おいしいものいっぱい
の八戸。中でも、
せんべい汁と日本酒
は絶品でした。

5 下山先生の講演から

講演の中から、いくつかの印象的な言葉を。「子どもと向き合う。子どもが喜んだり、反応したり、いい表情をしたりすることを大切に、徹底的に（教材を作る）。」「医ケアのあるなしでなく、どこで学ぶのがその子のためになるかで、学校は選択されるべき。」「自立支援の場が学校。医ケアの体制が整わないために保護者が学校にいるということは、自立に繋がらない。」「医ケアによって、教育の可能性を広げている。」「自立活動は、調和的発達（社会の一員として、豊かに生きる）の基盤。」「なぜ各教科を学ぶのか。発達段階に応じて、見方、考え方を育てる。それにより、生活の豊かさを享受でき、生活の質が向上し、未知の問題を解決していく（力につながる）。」「安全、信頼、挑戦のある学校づくりを目指していこう。」下山先生の講演から、肢体不自由児、教育へのあふれるような深い愛情を感じました。

6 良い教育は、良い環境から

八戸第一養護学校を視察させていただいて...。第一印象。きれいな校舎。手入れが行き届いているのを感じました。次に、すてきな掲示物。児童生徒の作品やコメントの掲示から、学習の様子がよく見える。作業学習の掲示から、手順だけでなく、何を作っているか、担当が誰か、までよく見える。教室掲示から、子どもたち一人一人の目標が見える。そして、保護者に伝えたい思いがたくさんつまった、通信が見える。しかも、どれも丁寧にきちんと貼られていて、美しい。丁寧さ、美しさ。良い教育は、良い環境から。

7 作業から、仕事へ。学校から、社会へ。

見学させていただいた作業学習。紙すきの作業を参観しました。動きやすく、わかりやすく、整った、構造化された配置。タイムカードで、より社会参加、仕事を意識できそう。時間の見える化で、作業時間をみんなが意識。学習の最後には自己評価と、それに対する教員の、次へのやる気につながるような言葉掛け。作業学習の先に、仕事や、社会へのつながりが見えました。

8 成長に感謝

前任校で卒業した生徒と、八戸で偶然の再会。照れながらも自分の作業に集中しようとする姿に、6年間の成長を感じました。一緒に学んだ昔のことを、ずっと忘れずにしてくれたことに、心から感謝。こんなこともあるんですね。

おわりに

指導の最先端と、肢体不自由教育の考え方への原点回帰。双方を改めて感じられた今回の全肢研。目的と手段を取り違えることなく、子どもたちの将来のよりよい社会参加に向けて...。精進あるのみ...